国語（小５）

1　通過率

(1) 全体

平均通過率（％）			対前年度比
平成１７年度	平成１８年度	平成１９年度	
７８．７	７５．４	７０．８	－４．６

○　昨年度と比べて４．６ポイント低いが７０％を超える通過率であり，概ね定着していると考えられる。
○　平成１９年度は確実な基礎・基本の定着状況を把握できるよう過去の同一問題や類似問題を取り入れた設問を構成した。概ね想定した結果となっているが，文章の中の状況把握や基礎的な文法に関する理解などの事項についての設問に関する通過率が低くなっている。

(2) 内容・領域

	平均通過率（％）			対前年度比
	平成１７年度	平成１８年度	平成１９年度	
聞き取り	９１．８	９７．６	７８．６	－１９．０
文学的文章	６５．０	７７．７	７４．１	－　３．６
説明的文章	７０．７	５８．７	６６．６	＋　７．９
構成・表現	５８．５	６６．７	７１．２	＋　４．５
文法・語句	８９．３	６６．２	６４．１	－　２．１
漢　　字	８０．６	８８．６	７５．７	－１２．９

○　「聞き取り」で，昨年度を大きく下回ったのは，より確かな聴取力を試すための設問を一部取り入れたことによる。
○　「漢字」について，昨年度より約１３ポイント下回ったのは，「感心」と「関心」のように紛らわしい設問の通過率が極端に低かったものであり，確かな使い分けをできる段階までの定着には至っていないためである。なお，過去の同一問題についての通過率は向上しており，指導の成果と言える。

(3) 観点

	平均通過率（％）			対前年度比
	平成１７年度	平成１８年度	平成１９年度	
話す・聞くこと	９１．８	９７．６	７８．５	－１９．１
書くこと	５８．５	６６．７	７１．３	＋　４．６
読むこと	６８．３	６５．８	６９．４	＋　３．６
言語事項	８５．２	７６．７	６９．６	－　７．１

○　「話す・聞くこと」の通過率が最も低いが，これは，平成１８年度まで９０％を超える通過率を維持してきたことで，今回はより細部の聞き取りまで求める問題を一部取り入れたもので，基礎・基本は概ね定着していると言える。
○　「書くこと」については，昨年度より約５ポイント上回っている。今年度も自分の考えを根拠（理由）を明らかにして書く設問を入れたが，このような形式には十分に対応している成果と考えられる。
○　「言語事項」については，概ね繰り返しの学習による成果が見られるが，一部実用に生かす問題に対しては課題が見られる。

2　通過率が低い問題

①　5　一(1)「原因」の反対語を選択する問題　（４２．８％）
　　・結果
　　※１８年度は「結果」の反対語を問い，２４．９％であった。
②　5　二(3)　くわしくしている言葉を選び出す問題　（２０．３％）
　　（ひゅうひゅうと→ふいてきます）
③　5　三(1)　適切な敬語を選択する問題　（５４．０％）
　　・ぼくは，校長先生のお宅に→うかがった。

3　特に定着を図りたい問題

①　1　一(1)　放送を聞いて，発表の中で述べられていたものには○をつける問題
　　（Ｈ１８　９８．６％　→　Ｈ１９　８９．５％）
②　3　一　　説明的文章で，筆者が述べている内容にあてはまるもの（あてはまらないもの）を選んで答える問題
　　（Ｈ１８　８４．６％　→　Ｈ１９　６４．２％）

【通過率が低い問題①，③】

5 一(1) 「原因」の反対語を選択する問題 （通過率４２．８％）	5 三(1) 適切な敬語を選択する問題 （通過率５４．０％）
5 次の各問に答えましょう。 一 次の言葉と意味が反対になる言葉を □ の中から一つ選んで、その記号を □ の中に書きましょう。 1 原因 □ 2 禁止 □ 3 安心 □ ア 解決 イ 安全 ウ 結果 エ 不安 オ 理由 カ 許可 キ 開始	三 次の文の敬語として、どれがもっとも適切でしょうか。ふさわしい敬語をそれぞれ一つずつ選んで、その記号に○をつけましょう。 1 友達が、ぼくの家に遊びに ア 来ました。 イ いらっしゃった。 ウ うかがった。

誤答傾向の分析

【反対語の問題】

○　１の「原因」についての通過率が最も低く，誤答は，オの「理由」が多かった。昨年度は「結果」を設問として「原因」を解答させ，２４．９％という通過率であったことから，まだ十分定着は図られていないことが分かる。

【敬語の問題】

○　誤答は，ウの「うかがった」が多かった。敬語については例年の類題のおいても通過率が低い。特に「尊敬語」よりも「謙譲語」に関する日常的な慣れについて不足しているものと考える。また，「丁寧語」が敬語として押さえられていないことも考えられる。

改善策

○　「原因」と「結果」のような反対語については，単語のみを扱って理解させるのでなく，例えば「両方を使って短文を作る」ように，自分が書いたり話したりする際に，目的や意図に応じた使い分けができるような言語活動を設定する。また，必要なときにはいつでも辞書が手元にあり使える環境を整え，家庭学習にも意図的に取り入れさせることで，語句について自ら調べる習慣を身に付けさせる。

○　高学年では，敬語の役割や必要性が自覚されてくる時期である。そこで，日常の具体的な場面を想定して「相手と自分との関係」を意識させる指導が有効である。さらに，そのことが国語科授業内だけでなく，平素の言語生活の中でも意識されるように，集会や学校行事等で実際に「使用の適切さ」を確かめていく。

【通過率が低い問題②】

5 二(3)
くわしくする言葉を選び出す問題　（通過率２０．３％）

二　――の言葉がくわしくしている言葉は――の言葉のどれでしょう。□に記号を書きましょう。

3　ア　強い　イ　風が、　ウ　山の方から　ひゅうひゅうと

エ　ふいてきます。

□

誤答傾向の分析

【修飾語の問題】

○　誤答は，イの「風が」が多かった。イを選択したのは，「言葉がくわしくしている」の「が」の意味をしっかりとらえていないためと考えられる。また設問が「言葉が」でなのか「言葉を」なのかによっても解答は意味を違えるものとなってしまうため，さらに一つ一つの言葉に，より注意を向けて考えさせていく必要がある。

改善策

○　中学校で品詞の分類や文構造の分析をしていくための基礎として，小学校高学年では文法的な類別の理解を深められるようにしていきたい。そのため，例えば本問題を使って「ひゅうひゅうと」だけでなく，「強い」「風が」等の係り方も問い，多様な意味や用法の語句に接することで語感や言葉の使い方に対する感覚を高めていくことが大切である。

○　このような語句の使い方に関する基礎は，さらに遡って小学校３・４年生段階で確かな力として培っておくべきである。一つ一つの語句を使い分けられるようにするために，この時期に「名前を表す」「動きを表す」「様子を表す」それぞれの語句を，文の主語になる語句，述語になる語句，修飾する語句のように，まずは楽しみながら大きく類別する活動を設定し，語句に対する理解を深めたい。

【特に定着を図りたい問題①】

1 一(1)　放送を聞いて，発表の中で述べられていたものには○をつける問題　（Ｈ１８　９８．６％　→　Ｈ１９　８９．５％）

1 今の放送で聞き取ったことをもとに、あとの問いに答えましょう。

一　この放送の中で述べられていたものには○を、述べられていなかったものには×を、□の中に書きましょう。

1 □ 自然は、わたしたちが生きていくうえでなくてはならないものである。

海や山など，豊かな自然の中で遊ぶのはとても楽しいことです。水や空気はきれいで，いろいろな生き物もいます。自然は，わたしたちが生きていくうえで，なくてはならないものだということを強く感じます。

けれども，その自然が人間におそいかかってくることもあります。例えば，台風や大雪による災害は，毎年のように発生しています。わたしたちの住む鹿児島県は，毎年のように台風が上陸し，多くの被害を受けています。

また，大雨で洪水が起こったり，雷が落ちたりすることもあります。雷では，１９９８年から２００１年の４年間に，全国で１７人も犠牲になっているそうです。

わたしたちが生まれる少し前に起きた１９９５年の阪神・淡路大震災では，多くのビルや高速道路がたおれ，火事があちこちで起こり６千人以上の人が犠牲になったそうです。

これらの例からも分かるように，自然はおそろしい面ももっています。わたしたちは，自然のことをよく知って，災害から自分たちの命やくらしを守ることも考えていかなければなりません。

出題のねらい

○　話すこと・聞くことの領域に関する問題では，「話し手の意図を考えながら話の内容を聞くこと」の定着度を調査するために，「自然」について書いた意見文のスピーチを聞かせて，話の内容を正しく聞き取っているか，スピーチの組み立ての工夫に注意しながら聞いているかという点をみた。

学習の重点

○　これまでの聞き取り問題の文章の中から，何を中心に聞き，どんなメモをとればいいのか「メモするべき部分」（言葉）に線を引いた上で，再度音声による聞き取りを試みるような確認の指導が大切になる。

また，　正しく効率よく聞き取るためのコツについて示し，日常場面における意識付けを図ることにより，低学年段階からの継続的な指導が必要である。

- 話の中心は何なのか考えながら聞く。
- 「メモはできるだけ短い言葉」で残す。
- 話の中で「事実」と「意見」を別にしてメモする。

○　また，単なる「聞き取り問題」としての扱いに終わることなく，自らの音声言語の学習に生かすために，重要語句や柱となる内容を見出しとしたり，中心文を抜き出して要約したりしながら自分なりの聞き取りメモの形式を確立させることが大切になる。このような練習を積むことで，「全体と部分，事実と意見との関係に注意して話したり聞き取ったりする」中学校１年の学習に発展していくものである。

【特に定着を図りたい問題②】

3 一 説明的文章で，筆者が述べている内容にあてはまらないものを選んで答える問題（H18　84．6％ → H19　64．2％）

3 次の文章は、「方言と共通語」という説明文の一部です。よく読んであとの問いに答えましょう。なお、段落のはじめにある数字は、その段落の番号を示しています。

1 みなさんの地域では、虫の「とんぼ」のことをどのように言っていますか。青森県津軽地方では「だんぶり」と言っています。そのほかにも、岩手県の一部の地方では「あけず」や「あけえぼぼ」と言ったり、鹿児島県の一部の地方では、「ぼい」や「ぼり」、「ぐわ」と言ったりします。この例はここで述べた二つの県に限ったことではありません。国立国語研究所編の「日本言語地図⑥」には全国の「とんぼ」の言い方が三十ちかく紹介されています。

2 このような例は、ものの名前だけではありません。「落ちる」を「あゆる」と言う所もあれば、「かわいい」を「めんこい」、「くだろう」を「くずもう」と言う所もあります。全く同じものや、同じ意味・内容のことを言い表すのに、日本国内でも、地域によって、それぞれちがった言い方があるのです。

3 ［ア］、それぞれの地方の、その土地の人同士が、毎日の生活の中で使っている土地言葉を「方言」と言います。これに対して、全国どこの人にも通じる言葉を「共通語」と言います。

4 「方言」には、その土地の人にとって、言いやすく親しみやすいという良さと、その土地の自然やくらし、気持ちや様子を細かく深く表すことができるという良さがあります。

5 ［イ］、山口県では、「アノ、ノンタ。」（あのね、あんた。）と言うときの「ノンタ」には、相手への強いうったえの気持ちがこもります。また、気持ちだけでなく、時間や状態の細かい言い分けができます。長崎県では、「雪がふっている」ときの雪の状態を、

雪がフルヨル。（雪がふりつつある。）

雪がフッチョル。（雪がすでにふり積もっている。）

のように、二通りに言い分けています。

6 東北・北海道の「シバレル」（きびしく冷えこむ）とか、京都の「ハンナリ」（上品で明るい）や、大阪の「オキキ」（ありがとう）などには、共通語では言い表せない深い意味と感じがこもっています。きびしい寒さで体がこわばるような感じを表すには、「冷える」「冷えこむ」ではなく、やはり「シバレル」でなければならないのでしょう。

7 「共通語」は、全国に広く通じる言葉です。テレビ・ラジオのアナウンサーの言葉、教科書や新聞の言葉などは、主にこれによります。また、他の地域の人と話すことができる、改まった言葉でもあります。式や会議、多くの人の前で話すときなどもこれによります。

8 わたしたちは、「方言」と「共通語」とを、それぞれの性格を生かして、場面や相手によって使い分けています。そのおかげで、言葉の生活が大変広く、深く、ゆたかなものになっているのです。

一　この文章では、「方言」の良さについていくつか述べていますが、**当てはまらないもの**を次の中から**一つ**選んで、その番号を□の中に書きましょう。

1　その土地の人にとって言いやすく親しみやすい。
2　気持ちや様子を細かく深く表すことができる。
3　他の地域の人にも気持ちや様子が伝わりやすい。
4　気持ちだけではなく、時間や状態の言い分けができる。

出題のねらい

○　説明的な文章を読むことの領域に関する問題では，「目的や意図などに応じて，文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること」の定着度を調査するために，「方言」と「共通語」をテーマにした説明文を読ませて，内容を的確に読んでいるか，文章構成の工夫をとらえているか，文章内容をふまえて自分の考えをまとめられるかという点をみた。

学習の重点

○　説明文の内容を理解するためには，与えられた文章の一部あるいは全体を簡潔に要約する力が必要である。そこで，小学校期にまずは，ある程度短い文章の中で確実に要約できるような指導を試みたい。その中で，中心語句や中心文をとらえて読み取るための手順等をしっかり押さえたい。

- 接続詞に着目→全体の中でどのような位置付けにある段落かを押さえる
- 繰り返し使われている「中心語句」から「中心文」を押さえる。
- 目的や必要に応じて必要なものを選び出す。

○　内容の「中心」を押さえる学習は，小学校中学年期にしっかり定着させたい。

その際には，意味内容だけを追うのでなく，「接続語」「文末表現」「繰り返し使われている言葉」等，必要な条件を，児童が発見できるような場を組むことが有効である。教科書教材だけでなく，新聞や雑誌等から見出しを付けたり，書かれた記事を再構成したりする活動を工夫したい。